

世界のくらしと文化

— モンゴル国 ①

見えない差異

— モンゴルの言語と
モンゴル人の名前から



バイクに乗った少女

風戸 真理

はじめに

私は一九九七年四月から一九九九年三月まで、平和中島財団の奨学生としてモンゴル国に留学した。この期間の大部分を首都ウランバートルから遠く離れた草原の牧畜地域で過ごした。遊牧民家族のゲル（移動式天幕）に同居させてもらい、牧畜の技術と牧畜民の社会のあり方に関する生態人類学的な調査をおこなった。

私が高校を卒業する時、同級生が東京外国語大学のモンゴル語学科に進学すると聞いた。その時、「この現代世界にモンゴル語を話す人がいるのだろうか」と思った。私にとってモンゴルは元の時代に栄えた歴史上の民族であって、同時代を生きる人びとであるとは想像もしていなかった。まことに恥ずかしい限りであるが、このような私が現在、モンゴルの研究をしている(1)。そして痛感するのは、いまでも多くの日本人と多くのモンゴル人がお互いについてほとんど知らないということである。

一 モンゴル人による日本イメージ

モンゴル研究を始めて後、モンゴル遊牧民から「一、二、三……を中国語で何というのか」、あるいは「中国語を話すか」と幾度となく問われた。これはつまり、日本人であるあなたの母語は中国語か、という問いである。また、顔を見据えられて「おまえ……ドイツ人だっけ？」と聞かれたこともある。「日本語って英語ですか」というのもあった。アジアと欧米の区別を自明視しない認識枠組みとの出会いは私にとって衝撃だった。

日本に戻ると今度は、「モンゴルでは中国語で話すのか」、あるいは少し遠慮気味に「モンゴル語は中国語と似ていませんか」と多くの人びとからたずねられた。近年、日本ではモンゴルに関するテレビ放送などの情報が増えた。また、人の移動が頻繁になり、とくにモンゴル人力士が角界で活躍している。

日本の国技とされる相撲は、モンゴルではどのように受け入れられているだろうか。モンゴル国では「場所」が始まると、老若男女が一日中テレビに釘付けになり、

日本人を次々と打ち負かすモンゴル人力士の姿を見ている。放送は一日三回、十両から横綱まですべてが繰り返し放映される。モンゴルでは「関脇」や「場所」など相撲用語が日本語のまま使われている。だが、モンゴル人力士の名前はモンゴル名でよばれることが多い。たとえば「ダグワドルジ（朝青龍のこと）がコトミツキに勝った」となる。

相撲を代表とする交流のおかげで、今やモンゴル人も日本人も互いに、「モンゴル」や「日本」という集団の存在を受け入れている。しかしその中身に関しては、両者共に相手を、中国文化の一部のようなものとして漠然とイメージしているようである。このエッセイをモンゴル国出身の知識人にチェックしてもらった。すると、「日本は漢字を使うから中国と似ているが、モンゴルのどこに中国との共通点があるのか」と上の一文を書き直すよう意見された。モンゴル人は概して、中国が嫌いである。

二 モンゴル人のよりどころ、モンゴル語

モンゴル人は日本の四倍の面積をもつ独立国家「モンゴル国」をもつ。これが朝青龍らの故郷、俗にいう「外モンゴル」である。モンゴル国の人口は約二五〇万と少ないが、その主要民族はモンゴル人、正確にいえばハルハ・モンゴル人である。そして大統領も国会議員もモンゴル人である。公用語はモンゴル語である。日本ですべてのことが日本語でなされているように、モンゴル国では国会討議、保育園から高等教育、テレビ・ラジオ・新聞報道、学術的・大衆的な出版物のほとんどがモンゴル語で書かれ、話されている。

モンゴル人はモンゴル国のほか、東北アジアの広い範囲に分散して暮らしている。すなわち、中国には内蒙古自治区（いわゆる「内モンゴル」）をはじめ、新疆や青海省などにモンゴル民族の自治行政体が複数ある。またロシア連邦には、ブリヤート共和国やカルムイク共和国をはじめとした一定の自治権をもつ行政領域がある。だが、中国やロシアにおいてモンゴル人は少数民族である。

は、このモンゴル文字による教育と出版がおこなわれている。ところが、モンゴル国とロシア連邦内のモンゴル人は、ロシア語と同じ文字であるキリル文字で自分たちの言葉を書き表す。キリル文字は、旧ソ連の政策により識字率向上を第一の目的として導入された。キリル文字はモンゴル文字よりも文字が少なく、また口語に近い正書法が定められたため習得が容易であったとされる。また、ロシア人でも文字が解読できた。なお敗戦後の日本においても、GHQにより日本語をローマ字書きするよう強く勧められたことがあった。日本の知識人は大議論の末これを退けた。そのような経緯があって、いま私は漢字とかなを使ってこの原稿を書いている。

三 「誰の子か」

さて、私が調査をおこなったのは、モンゴル国の中央部に位置するアルハンガイ県チョロト郡バイヤンハイルハン行政区（以下、ハイルハンとする）である（地図→）。ハイルハンで私にはじめて出会った人が発する第一声はいつも、「誰の子か」だった。父の名をたずねる決ま

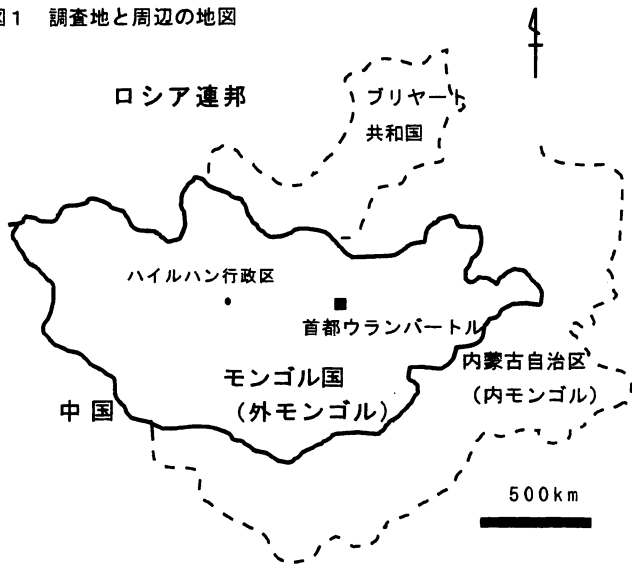
る。モンゴル人が首座民族の位置を占めるのは世界中にモンゴル国ただ一つである。

モンゴル系諸民族の生活と文化には、多様な地域バリエーションがあるが、共通しているのはモンゴル系の言語を話す点である。モンゴル語は膠着語（こうちゃくご）であり、基本的に日本語と語順が同じである。中国語やロシア語とは文法的にも系統的にも似ていない。

文法については、たとえば「私は大学へ行く」をモンゴル語では「ビー（私は）・イヒ（大）・ソルゴリ（学校）ト（に）・ヤウン（行く）」という。ところが中国語では「我去大学」と、動詞を先に出す英語のような語順となる。「学校に行かないのですか」といった否定形を用いた婉曲表現も共通している。「ソルゴリ（学校）ト（に）・ヤワフグイ（行かない）・ユム（の）・オー（か）」と言うと、相手にやんわりとプレッシャーをかけることができる。

モンゴル語を表記する文字については、一三世紀以来の歴史をもつ「モンゴル文字」がある。これはウイグル文字をもとに作られた縦書きの文字で、日本語とは反対に左から右へと書いていく。中国内のモンゴル人地域で

図1 調査地と周辺の地図



り文句である。四〇代以上の人びとは、私が彼らの親戚か知人の娘で、そのつながりによってこの「見知らぬ娘」を「知っている娘」に変換できればと淡い期待を寄せるかのように、「誰の子か」とたずねた。

ハイルハンでは見知らぬ者が来ると父の名をたずねる。答えは、父親がいれば父の名、父がいなければ母の名によって「誰その息子／娘」という。他の行政区や他の郡の出身者は地名をつけて、「どこそこの、誰その息子／娘」と名乗る。父の名を言っても相手がわからない時には、兄や男性親族の名をあげて「誰そのドゥー」と言ってみる。「ドゥー」は広く年少親族を意味する。

ハイルハンでは本名があまり使われず、あだ名で呼ばれることが多かった。大人が幼児に親しみをこめて呼びかけるいくつかの呼称のうちの一つが定着し、大人になっても呼ばれ続ける。たとえば「赤ちゃん」や「はげ」である。ただし本名、あだ名ともにバリエーションが多いとはいえず、同名で呼ばれる人が複数いた。このような事情があつて、「どこそこの誰の子、はげ」といった

具合に「誰の子か」がいつもついて回る。

四 姓のない社会

モンゴル人の名前には姓がなく、名前だけである。実際には、同名の人が多いことや、外国人と関わる時に姓がないと不便であるため、父の名を姓として代用している。具体的には、「誰の(子)」という形容詞として父の名を用いる。身分証明書にもこれを適用し、姓の欄に父の名の所有格を記載する。これは「誰の子か」という問いに答えているのと同じである。なお「父の名」は結婚や離婚により変わることはない。

このような名前のしくみは、モンゴル国の中だけでは全員がそうなので不自由はない。しかし中国やロシア連邦の国民であるモンゴル系の人びとは、名前に関する支配的な基準に適應する必要がある。中国においては、漢人と接触の歴史の長い南西部のグループはモンゴル名ではなく漢人風の名前を使っている。姓と名の二つからなる日本と共通した命名法である。一方、大部分の内モンゴ

ル人は、たとえば「ガルサンドラム」といったモンゴル名に音の似た漢字を当てている。さらには、その一部を姓、残りを名として役所に届け出ている。モンゴル人どうしはモンゴル名で呼び合うが、多くの漢人は学校や職場で、モンゴル人に姓がないとは知らずに名前の一部を姓として用いる。

ロシアでは、名前は名、姓、父称の三つからなり、行政登録にもこの三つが必要である。モンゴル系の人びとにとって名と父称(父の名)は親しんできたものであるが、もうひとつ姓をつけなければならぬ。ブリヤート共和国では一九五〇年代頃まで姓と父称に関する基準がなく、同じ両親のもとで育つ子どもが、父や祖父の名を個々ばらばらに姓や父称として登録していた。このため現在でもキョウダイの間で姓が異なる場合がある。

では、日本で暮らすモンゴル人たちはどのように呼ばれているだろうか。内モンゴル人は、漢人からよばれる「姓」を日本語読みした「名字」で呼ばれることが多い。つまり、モンゴル名の当て字の漢字を日本語読みした「名字」で呼ばれるのである。たとえばスチン氏はス

ーさんとなる。彼女の日本滞在を保証する書類には、姓の欄に斯(ス)、名に琴(チン)と記されているので、そう呼ばれるのが仕方のないところもある。だがスチンは「智慧」を意味するひとつの語であり、スはモンゴル語として意味をなさない。内モンゴルの人びとは、中国で生涯受けてきた漢文化への同化圧に疲れて、異文化の人びとがモンゴル文化を理解しないものと諦めているようにも見える。

モンゴル国から日本に来た人びとは、自分の名前をラテン文字(英語のアルファベット)に転写して記す。日本人のほとんどがキリル文字を読めないことを知っているからだ。彼らは、書類上の正式な名前と関係なく、慣れ親しんだあだ名や、日本人が発音できる折衷案を提示することで、日本における自分の名乗り方を自分で決めている。外モンゴル人は異文化と出会う時に根元的な自信にあふれた強さをみせる。内外モンゴル人の態度の違いには、国家のなかでマイノリティー／マジョリティーとして生まれ育った経験が影響していると考えられる。

五 おわりに ― 見えない差異

ハイルハンの年長者のなかには、私を見て外国人だと信じない人が多かった。目が切れ長で、瞳が黒く、髪も黒く、なんら自分たちの子どもたちと変わるところがなかったからだ。このために「モンゴルの」「未婚の女らしく」振る舞うように強いられて苦勞もした。

それと同じように、日本に来ているモンゴル人留学生も日本人と間違われて、忙しい地下鉄駅員などから「外国人などと言って人をばかにするんじゃない」と怒りを買ったりするという。モンゴル人は容姿や服装、日本語の話し方などが、最近増えている中国人と比べても日本人に似ていると思われるようだ。

とはいえ、日本ではモンゴル人とは誰かについての理解は乏しい。もう一度まとめると、モンゴル人のなかには、中国国籍の「内モンゴル人」とモンゴル国籍の「外モンゴル人」の両方がいる。ある外モンゴル人は、日本の社会科学系の大学院入試の面接で、「あなたは名前をな

ぜ漢字で書かないのか」と問われ、その大学院スタッフに失望したという。私たちが身近なアジア人どうしは、自分を中国人と間違われると憤慨しても、自分に似た相貌の外国人をみるとなぜか中国的なイメージを押しつける癖があるようだ。

(かざと まり／京都大学地域研究統合情報センター研究員)

注(1) モンゴル研究の道に入った経緯の詳細については、

風戸真理(二〇〇六)「モンゴル研究への苦難の道の

り」京大探検者の会編『京大探検部一九五六年から二

〇〇六年まで』(東京：新樹社、pp.451-461)に詳し

い。